

---

# 異世界ライフはさぁ大変 【番外編】

楽阿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界ライフはさあ大変 【番外編】

### 【Nコード】

N6907T

### 【作者名】

楽阿

### 【あらすじ】

本編に入らなかった分をちまちまとアップしていく予定です。  
不定期更新です。

## 番外編？

その男を始めて見た時。

大きく振り回した耳と尻尾が見えました。

……いえ。

幻ですけれども。

そうして。

あつけに取られている間に思いっきり抱きしめられてしまつて。  
すでに四半刻は過ぎたと思う。

「可哀想に、ハル。あんな奴に預けるしかなかった俺を恨んでいるか？？」

ぎゅむぎゅむぎゅむ……。

苦しい。

だけど力を緩めることはなく。

「早くいつもの宮で過ごしたいだろ？今用意させるからな？」

ぎゅー……。

……暑い。

痛い。

苦しい。

この馬鹿力はどうにかならないものか。

「此処にこなかったから起こっているのか？だが、あいつ等が駄目だと言い

張つて……ああ、こんなことならもっと早く来るべきだった」

……。

「……何をしている」

低い……地を這うような重低音の声。

今は天使に見えるよ、ジークフリート。

「ハルに会いにきたに決まっている」

ぎゅぎゅぎゅ……。

さらに抱きしめられ……。

もう少しでお花畑が見えそうです。

一度もあつたことはないおとーさんとおかーさんが手を振っているような気がします。

「私は、何をしているのか、と聞いているんだ。阿呆」

……こんなジークフリートは見たことなかった。

眉間に皺がこれでもかと寄っている。

隙があれば相手を殺すかのような激しい、視線。

「何だと？ 大体、お前がハルをこんな眼に……」

「馬鹿だ、馬鹿だ、とは思っていたが……。お前は私の言ったことが全く頭

に入っていないらしいな？」

「……はん！ 誰がお前の言うことに耳を貸すかつ」

「……ほう？ 私があれほと言ったことがまだ判らないのか？ いや、馬鹿だか

ら分からなくても仕方ないのかもしれないがな？ もう一度言っておくが、ハ

ル様が飲まされておいでだった毒は複雑なもので、その解毒には時間がかか

るといったはずだ。安静が必要なことも」

「……ぐっ」

「解毒薬も一歩間違えれば猛毒になるほど強力なもので、特に光は厳禁だと

も言っただな？」

「……うう……」

あ、犬耳と尻尾がしな垂れてきましたよ。

「一時的に体に麻痺の症状が出るが、完全に解毒できるまでは飲み続けなけ

ればいけないことも、だ」

⌈  
⋮  
⌋

「言っ  
たな？」

「ああ」

「犯人が見つかるまでは安全のために離宮で過ごしていただくことも、犯人

を油断させるために敢えて接触できるのは最低人数にすることも……。何か

あればすぐに知らせるから大人しく匍として政務をしつかりこなせとも言っ

たはずだ！」

「ああ」

抱き抱える男の尻尾が見る間に垂れ下がっていく。

⌈  
⋮  
⌋

「だいたい、きちんと政敵を把握し切れなかったお前がそもそもの原因だろ

うが！違うか、シリル皇帝陛下」

あ。

あは。

あははははははつ。

やっぱりおじさんでしたか。

非常識振りがよく分かりました。

でも、まあ。

そろそろ助け舟を出さないかね。

い

「……如何なさいました？我が君」

「うあれた……（疲れた）」

ジークが振り返って。

「……少しお休みなさいですか？」

苦しそうにしていたから。

うるたえたんだろうね？

多分。

シリル叔父さんは……思いっきり私を抱きしめてくれたのだった。

「だ、だ、だ、大丈夫か、ハル」

「うー」

「……いい加減、放せ。殿下が苦しがつている」

「……あ……」

半刻近く抱きしめられたままだった私は。

最後に加わった力に耐えられず、再び意識を手放すことになったのだった。

【教訓】何事も程々がいいという事。

## 番外編？（後書き）

シリル皇帝陛下の属性は犬です（笑）

本編に入れると話がいつまでも始まらない（序章が長くなって）のでこちらにいました。

## 番外編？

……はあ。

全く少しも落ち着きがない。

あちらを見たかと思えばすぐ別のものを見る。

それも、殆ど食べ物ばかりだ。

串焼きなど買ってどこで食べようと思っておいでなのやら。

昼食は人の2倍はお食べになられて筈なのだが……。

成長期とはいえ、自分はあれほど食べていなかったはず……。

ああ。

今度は飾り飴に気が付かれたらしい。

どんなに綺麗でも所詮飴……砂糖などの固まりだというのに。

……仕方ない。

後で宿の方で飴を手配するか。

2年前。

毒を服用していた殿下は急に倒れ、もう少しでお亡くなりになる所だった。

皇帝シリルからの連絡を受け駆けつけたときは体を動かすどころか、自分の意思を

表示することもままならないほどだったというのに。

どんな馬鹿が毒なんぞ毎日飲んでいたのかと思っていたら。（なにしろ皇帝が

あいつだからな）

1年間の回復期間にかなりの努力をして、今では殆ど副作用は見られない。

かなりの努力家だ。

それに、僅か12歳になったばかりだというのに積極的に政務に



参加しよう

とする姿勢はすばらしい。

やつに爪の垢をせんじて飲めといいたい。

……現在是一部とはいえ、宰相と俺の確認を受けながら、だが、重要な政務を

行うようになってきている。

いくつかの法令やアイデアなどは大人も舌を巻くほどだ。将来が楽しみだと、若干頬が緩みそうになるが。

次の瞬間殿下のしている物を見て、再び頭が痛くなった。

頼みますから、一国の皇太子殿下が“ワームリア（大蛇の蒲焼”なん  
か食べようとししないで下さい。

まったく。

市場にいる間気が抜けない。

早く宿に着かねば……。

思わず歩く速度を進めるのだった。

## 番外編？（後書き）

市場でのジーク視点です。

変なものを食べないように気を張っています。

## 番外編？

その方に御逢いしたのは一年前だった。

白銀色の髪。

深緑色の瞳。

その肌は透けるように白く。

その唇は赤く。

愛らしい顔立ちは、宛らブランシュネージュのようで。

「あなたが毒を作り出してくれた人？」

……一年前。

孫を囚われ、否応なしに手伝わされた。

それが殿下の命を奪うものとは知らずに。

いや。

知っていても作っていただろう。

可愛い孫を取り返すために。

陰謀は明らかになり私は捉えられた。

警備隊が到着したとき孫はすでに死んでいたと、知らされた。

もう、何も考えたくはなかった。

「何か言うことはあるか」

殿下の傍らにいるのはブリーゼ卿……。

私の作り出した恐ろしいものを無毒化させたという。

この方がいるのならば大丈夫だろう。

「いいえ。いまは、ただ、死を賜りますことを願っております」  
これが最後の願い。

「い・や」

は？

私は緊張しているに違いない。

だからありえない幻聴が聞こえてくるわけで。

「い・や」

「好きにしていって言ったよね？」

「……御意」

「じゃあ、この人、僕にする」

「は？」

「僕のそばでお仕事してもらおう」

「……殿下？」

「んゝ。ぼくの、忠実な下僕という事にする」

微かに「殿下、それは……」や「法務省が……」などが聞こえてくる。

聞こえては、くるが。

最終的に。

殿下はカーティス・エセルギア・D・ファレルを如何するのか押し通された。

そして。

ハロルド・K・ウィラウス・ヴァイセエスリヒト皇太子殿下は忠実な下僕を

一人手に入れました。

## 番外編？（後書き）

カート視点の出会い編。

この後ジークと意気投合します（主に薬学方面で）

## 番外編？

まあ。

取り敢えず。

せつかく過保護な保護者<sup>ジークとカート</sup>Ⅱお邪魔虫とも言つ……がいないので色々弄くつてしまおう。

今回の収穫品を目の前の大きな<sup>ハンカチもどき</sup>目の布切れにぶちまける。えーと。

『成長促進』『品質向上』あとは『病虫害予防』……かな？  
「んじゃ。『おおきくなあれ』」

びし。

光の渦が小さく辺りを包む。

……術が発動したのはいいけど。

お腹が空きました。

言い忘れていたけど（誰にというのは突っ込まないように）。この世では魔術が存在する。

全員が使えるわけじゃあないけれど、1/3くらいは素質があつて。

さらにそのうち10人に1人くらいが魔術師になる。

多いのか少ないのかはよく分からないけれど。

魔術は系統として主に地・水・風・火・金属性に分かれていて、

勿論、魔術

師ギルドなんかもある。

必要に応じてギルドを通して依頼することが多い。

……ちなみに私が使っているのは魔術ではありません。

じゃあ、何か、ということになるのだけれど。

宮殿内の書庫のさらに奥に隠されている禁術書庫というものがあ

って。

病氣（とゆうか毒なんだけどね？）療養中で動けない時間が長くて、暇で暇

で仕方なかった私は、書庫の本を読み漁っていまして。その禁術指定書の中に

チヨロリっと（ほんと、ごく僅かに）書き記されていることを信じれば、だけど。

真術を使えます。

魔術とはどう違うのかといえば“よく分からない”が正しい。

まあ似て非なるものらしい。

この真術、魔力を使う魔術とは違って（魔力は寝たら一定量回復する）、精

神力を使うらしく激しく疲れます（寝ても回復されないから）。

まあ。

想像力と精神力だけで何でも出来てしまうチートな力には違いなけれど。

一回使った後激しく疲弊した私を見て、ジークとカートに使うのを止めさせ

られました。

今はそこまで疲れないんだけど、使ったのがばれたら過剰反応したみたい

にお小言の嵐が始まるので、現在は隠れてしか使えない。

徐々にばらしていつていつか正々堂々と使えるようになるというなあ。

## 番外編？（後書き）

主人公の秘密その1です（笑）

真術は後々本編で出していく予定です。

ハルは主に自室でこっそり使ってます（頻度は低いけど）。  
本編第1章？と？の間の出来事になります



## 番外編？

暑い。

暑いです。

いぢめでしょうか？

この暑さは。

……ということ。

扇風機を作ろうと思っていたんだけど。

その前にちよつと思いついたことがあった。

薄めの上衣を用意して（比較的どの服装にも合わせられるデザインのものだ）。

『通気』『除湿』『適温維持』……こんなものかな？

うーん。

でもどうせならもつと付加をつけよう。

『防刃効果』『防火効果』『防毒効果』『防滴効果』

うん。

こんなものだよね。

「まあこれぐらいで。『防御特化快適な服』になって」

ミシッ。

パシユッ。

光が妙な音を立てて収束する。

うーん。

無理なのかな。

取り敢えず手近なナイフで突くけど穴が開きません。

うん。着てみよう。

……ふふふふふ。

あはははは。

………成功です。

この後、皆の分も用意しました。

番外編？（後書き）

第二章？と第三章？の間の話。

## 番外編？

アルメイダ行きが決定した後。

何種類か組み合わせを変えて服を用意して。

そのとき合わせるアクセサリも必要ってなって、衣裳部屋から  
持ってきた  
あいてむ  
腕輪……。腕輪……。

何か呪われてますよ、というオーラがひしひしと伝わってきています。

でも呪いが何なのか分らない。  
おまけにデザインはかゝなり好みなんだよなあ。

何とかして呪いを解いて持っていきたいけどなあ。  
むう……。

「まあ、ハロルド様。まだ片付けていなかったのですか？」  
「ん？ん〜」

「綺麗ですわね。この腕輪」  
そういつてリーナが手に取った瞬間。  
腕輪が装着されてしまった。

「うえ」  
「きゃあ」

……どうしよう。  
「痛くない？」

「痛くありませんわ」  
ふむ。

「外せる？」

「はい」

腕輪がするりと離れる。

気のせいか……。

自動装着効果があるだけなのかもね。

よし、持つて行こう。

そう思つて腕輪を振り回しているときだった。

手元がくるつて（わざとではない）腕輪が入ってきた人物のほうに飛んで

いったのは、不可抗力だ。たぶん。

入ってきたカートにもう少しで当たる、と思つた瞬間、それは起こつた。

薄煙が辺りに充満し、様子が見えない。

……やばい。と思い始めた頃、煙が晴れてきました。

逃げようと思つたのは次の瞬間。

カートの姿を見て。

……若返り……過ぎでしょう？

そこには。可愛らしい、10歳の男の子がいましたとき。

見なかったことにしたい。

【教訓】後悔先に立たず

## 番外編？（後書き）

カートが10歳になってしまっ話です。

まあ。カーとは差ほど驚かずに現状になじんでしまいますが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6907t/>

---

異世界ライフはさぁ大変 【番外編】

2011年6月8日15時14分発行